

令和6年度大田区議会セーラム市親善訪問調査 概要

- ◆期 間 令和7年1月27日(月)～2月1日(土) 6日間
 ◆訪問都市 アメリカ合衆国 マサチューセッツ州 セーラム市
 ニューヨーク州 ニューヨーク市
 ◆団 員 団 長 押見 隆太 副団長 小峰 よしえ 団 員 中坪 悦子
 団 員 柿島 耕平 団 員 鈴木 ゆみ 団 員 伊藤 つばさ
 団 員 とく山 れいこ

◆行 程

	月 日	都 市 名	スケジュール
1	1月27日(月)	東京(羽田) 発 JFK 着 JFK 発 ボストン 着 セーラム市	日本航空 JL006 (エコノミークラス) ジェットブルー B61418 (エコノミークラス) ピーボディー・エセックス博物館訪問
2	28日(火)	セーラム市	ベントレーアカデミーイノベーションスクール訪問 セーラム市長訪問
3	29日(水)	ボストン 発 JFK 着 ニューヨーク市	アメリカン航空 AA4721 (エコノミークラス) ニューヨーク公共図書館訪問
4	30日(木)	ニューヨーク市	ハドソンヤード、ハイライン視察 ニューヨーク市移民対策局訪問
5	31日(金)	JFK 発	日本航空 JL003 (エコノミークラス)
6	2月1日(土)	東京(羽田) 着	

◆経 費 等

(1) 議員7人分 計10,684,920円

内 訳 (1人あたり 1,526,417円)	航空賃など交通費、 視察経費他	1,179,625円	航空賃、空港税、空港施設使用料、現地車賃通 訳料、添乗員同行費用他
	宿 泊 料 他	273,697円	宿泊料金、食事料金(昼・夕)
	日 当 他	73,094円	日当、支度料他

(2) 宿泊ホテル等

セーラム市 ホウソーンホテル (2泊)
 ニューヨーク市 シェラトンホテル (1泊)
 その他 機中泊 (2泊)

はじめに

団長 押見 隆太

令和6年度の大田区議会セーラム市親善訪問団は、令和7年1月27日から2月1日の3泊6日の日程で実施され、姉妹都市であるマサチューセッツ州セーラム市への親善訪問とニューヨーク州での視察調査を行った。

大田区議会のセーラム市親善訪問団の日程としては大変めずらしく1月下旬での訪問となり、寒波の影響もあり、強風の中で気温はマイナス10度以上と極寒の中での訪問で、期間も3泊6日の強行日程で国際線航空機も往復とも満席という大変タイトなスケジュールとなった。

今回の7名の親善訪問団であったが、団長の私以外は初めての親善訪問で、アメリカ合衆国初訪問の団員もいた。セーラム市は毎回報告書でも書かれているが、一度でも訪問した方たちが惚れこんでしまう大変すばらしい街である。33年前に姉妹都市提携を結んでくれた先人たちの活動に感謝する。

親善訪問の最大のミッションは、現在、毎年セーラム市で受け入れていただいている大田区の区立中学校生徒海外派遣事業の子どもたち18名を、この先も永続的に受け入れていただくよう、現ホストファミリーへの感謝御礼と、新規のホストファミリーの開拓にある。セーラムでのコーディネーターとして非常に重要なポジションとして活動されているピーター・ドーランさんは平成5年9月から半年間、大田区とセーラム市の姉妹都市提携の流れで、大田区役所の文化国際課で勤務さ



ドーラン家寄贈の記念サイン

れていた。アメリカ帰国後もセーラム―大田クラブの会長なども歴任しながら、大田区、セーラム市両都市の交流に尽力してきた。今回の訪問でもピーター・ドーランさんはボストン空港の出迎えから、早朝の同空港での見送りまで帯同いただき、私たちの訪問団の活動をサポートいただいた。

今回は1月28日の夜に毎年大田区の中学生を受け入れてくださっているセーラム―大田クラブのホストファミリーを中心とした皆さんとセーラムのレストランでパーティを開催した。大田区議会から私たち7名、セーラム側からも7名が参加し、大田区側は3人が和装をし、日本文化に関連した様々な催しを開催した。日本の浴衣の着用体験や、日本舞踊と介護体操がミックスされたNOSS（ノス）という新しい踊りをみんなで踊ったり、筆ペンを使って皆さんのお名前をカタカナで書写したり、お香の体験をしたり、折り紙を披露したりと、数多くの日本文化の体験をしていただき、当初大田区立郷土博物館とピーボディー・エセックスミュージアムが姉妹博物館協定を結んだように文化の交流を行った。日本に関心の深い皆さんがお集まりなので、今までにないくらい懇親をはかることができた。

今年度は私たちの大田区議会親善訪問団のほか、大田区立中学校生徒海外派遣事業、玉川副区長を団

長とする大田区民訪問団によるセーラム訪問と、大田区とセーラム市がより密になる一年をおくれたと思う。このようなことができたのもピーター・ドーランさんのご尽力があつてこそである。



セーラムの方々とのパーティにて

2024年には訪日外国人は3,687万人とコロナ前を上回り、過去最高を記録した。2025年には4,000万人を超えるのが確実視されていて、2030年には6,000万人をめざしている。10年前の2014年の1,341万人と比べると、コロナ禍も挟んだ中で、驚異的な伸びを示している。一方日本人のパスポート保有比率は17%まで落ち込み、2014年の24.2%と比べると大きな落ち込みを見せている。この数字

を見ても、国際化が進んでいる中で、日本人の外国離れが進んでいるのも事実である。大田区では、国際教育の推進、世界とつながる国際都市おおたを担う人材を育成するため、英語による実践的なコミュニケーション能力を育成するとともに、豊かな国際感覚をはぐくむ教育を推進し、外国語活動、外国語科などの英語の授業などを行い、おおたグローバルコミュニケーション、OGCを導入し、VR・ARを活用した事業にも取り組んでいる。

また大田区立中学校生徒海外派遣事業でも来年度からはオーストラリアのパース都市圏へ生徒を派遣することとなり、セーラム市18名・パース18名と合わせて36名の生徒派遣事業となる。このように国際化の流れの中で、大田区では積極的に子どもたちに英語と触れ合う機会を作っている。その中で、セーラム市でのホストファミリーの確保は非常に重大な課題である。セーラム市への派遣事業も31年続いており、幾度となく大田区の子どもたちを受け入れていてくれて経験も多いベテランのホストファミリーは安心を抱く半面、高齢化も進んでいる。コーディネーターでもあるピーター・ドーランさんも教師として勤められてきたが、定年を迎え、本格的に新規のホストファミリーの開拓を社会貢献活動の一環として尽力くださっている。大田区・大田区議会としても、今こそ活動できる時間が増えたピーター・ドーランさんを支え、ホストファミリーの新規開拓をサポートするタイミングである。2026年にはセーラム市が市制400周年を迎える。この機会に姉妹都市としてさらなる親睦を重ね、おおたの子どもたちが笑顔や涙をたくさん体験できるよう、我々大田区議会でもさらに尽力していきたい。

他にもこの後の報告でもあるように、セーラム市では、ピーボディー・エセックス博物館表敬訪問・視察やセーラム市長への表敬訪問等を行い、ニューヨークでは、ニューヨーク公共図書館やハドソンヤード再開発等の視察を行い、またニューヨーク市移民対策局とのミーティングを行い、大田区議会議員という一政治家として素晴らしい経験を得ることができ、区政に活かし、よりよい大田区を作っていく。

1月27日(月)午後3時少し前にボストン空港に到着した。専用車に乗って、セーラム市に向かった。車窓から見える住宅街は、シルバニアファミリーに登場するような風貌の家が多く見受けられた。空港から1時間ほどで、専用車はピーボディー・エセックス博物館に到着した。博物館の入口にはルネサンス時代のバロック期の画家ヤーコブ・ヨルダーンスの作品を模したフラッグが掲示されていた。「Saints, Sinners, Lovers, and Fools: 300 Years of Flemish Masterworks (聖人、罪人、愛人、そして愚者：フランドル



ピーボディー・エセックス博物館外観

の巨匠作品 300 年)」の特別展示が行われていた。南ネーデルランドで 15 世紀から 17 世紀にかけて制作された、美しきルネサンスとバロックの絵画、彫刻、装飾の展示には興味がそそられたが、当日は警備員も含めた博物館の全スタッフのミーティングがあり、午後 5 時までには完全に館外に出なければならないため、40 分間という限られた時間でガイドの後について日本や大田区に関連するものを中心に説明を受けた。

P E M の公式ホームページでは、「PEM' s relationship with Japan extends back more than 200 years. (P E M と日本との関係は 200 年以上にわたる)」と紹介されている。



日本にまつわる展示

A～Z までの展示の J の展示ブースには、「Japan」と表示され、その横には、エディス・オーウェン・ロブが 1914 年に寄贈した、アメリカの画家フランク・ウェストン・ベンソンが 1913 年に描いたエドワード・シルベスター・モースの肖像が飾られている。モース氏が発見した大森貝塚で出土された土器の破片、石膏模型、スケッチ、江ノ島で採集された貝殻の他、特記すべきは、当時の日本人の暮らしに使われていたものが多く展示されていたことだ。うさぎの形をした「手あぶり」という湯を入れて手を温める湯たんぽのようなもの。火打ち道具、火ばち、木の箱でできたこたつ、すりこぎ、片手なべ、ほうき、はたき、ちりとり…これら「モース・コレクション」はつまらないものが多く逸品は少ないとけなす専門家がいるが、「人の捨てるものを拾う」ことにモースの真

髓があると言われる。モース氏の日本滞在期間は約 2 年である。1877 年 6 月 17 日の深夜にモースを乗せた船が横浜港に入港。横浜から東京へ向かう汽車が大森を発車した直後に線路わきに白い貝殻が露出していることに気づき、貝塚発見に繋がった。東京帝国大学の理学部生物学科で初代の動物学を教える教師となったモースは、9 月に弟子とともに発掘作業に取り掛かった。考古学者、民俗学者、ダーウィン派の動物学者、海洋生物学者として有名となったモースは、1879 年秋にセーラム市に戻り、ピーボディー科学アカデミーの館長となり、36 年間その職にあたり、ここを日本の民俗学資料の拠点とした。モースが収集した日本の住まいに関する情報は、北海道から九州までに至る。神社・仏閣ではなく、形と

しての日本人の日常の生活に着眼したことは大変興味深い。有名なエピソードがある。瀬戸内海地方を旅していた際に、1週間ほど旅館を留守にするため、財布と懐中時計を女中に預けたことがあった。女中は、それらをお盆の上に乘せて畳の上に置いていただけであった。1週間後に宿に戻ると、預けた状態のままであった。鍵のかかっていない部屋、誰でも出入りができる状態であるにも関わらず、自分と他人のプライバシーを分ける目に見えない境界線を空間で捉える日本人の感性に、モースは甚く感激したそうである。そうした日本人が当たり前としてきた日常生活にモースは魅せられたのである。私たち現代の日本人は忘れていないであろうか。客観的に日本を知る上でモースの研究は学ぶべきであると考え。そして、日本人である私たちが見過ごしている日常にこそ真髓があるということ。

博物館の日本の展示のフロアに、つい立、床の間の展示がされていた。つい立を立てることで自然と空間を仕切り、床の間に掛け軸や花瓶をおくといった空間を仕切る（元々は身分の高い方が座る場所として一段高くしていた）日本の暮らしに根付いたものである。今回は見る事が出来なかったが、大工や職人が使っている道具類の展示もあったそうだ。日本人を畏怖という精神の観点から研究し、文学作品として残したのは小泉八雲であるが、モースは物質から日本人の研究を行った。



床の間の展示

P E Mには、財団の基金や美術品の寄付が集まり、多くの美術品を貯蔵し、セーラム市の魔女狩りや魔女裁判といった過去をモース氏の民俗学研究の成果と芸術の力でイメージアップに転じ、「文化・芸術のまち」と世界から認知されてきた。

最近是中国の作品の展示がアジアの中では多くなっているという。これも博物館を維持していくための寄付者に中国系が増えているからだろう。次に訪れた際には、モースが伝えたかった日本を知る様々なアイテムの展示が増えていることを願う。異国の地で、日本を客観的に知る良い機会に恵まれたことに感謝する。



アニラ・クアユム・アガの作品

訪問団の集合写真は、パキスタン出身のアニラ・クアユム・アガが制作したオブジェの前で撮影した。このオブジェは、レーザーカットされたスチールキューブを天井から吊り下げ、1つの電球で照らすことにより、部屋の壁や床に複雑な模様の影ができるもので、あらゆる人種・性別・宗教の人々を歓迎する場所をイメージしているとのこと。彼女が育ったパキスタンのラホールで、宗教差別を受け、モスクや他の宗教施設から排除されてきた経験に突き動かされた作品である。

大田区立中学校生徒海外派遣でセーラム市を訪れる生徒たちには、海外から見た日本の素晴らしさを学び、自信を持って世界に飛び出していくことを切に願う。

参考文献

- ① Peabody Essex Museum 公式サイト
<https://www.pem.org/>
- ② 「モースと日本」 共同研究 守屋毅編
- ③ 「モース・コレクション」 財団法人千里文化財団 国立民族学博物館編集
- ④ 「日本考古学の原点 大森貝塚」 新泉社 加藤緑
- ⑤ 「モースの贈り物～蘇る 100 年前の日本～」 小学館 ジョン・セイヤー・守屋毅著

◆セーラム市

1626年に設立。アメリカで最も古い入植地のひとつである。

17世紀には、セーラムで魔女裁判が起こり、多くの住民が魔術の罪で告発され、沢山の犠牲者が出たことが有名である。背景は、宗教的・社会的緊張に、厳しい冬と食料不足が重なり、人々の不安が高まる中で、少女たちの異常行動（集団ヒステリー説）が「魔術」と言われ、裁判は混乱と不安を招いた。後に誤りが認められ、「法の歴史において稀にみる悲惨な結果を招いた」こととして、現在も「法」と「正義」の教訓として語り継がれている。

18世紀～19世紀は貿易港として発展し、中国や東南アジアなどとの交易で栄えた。

19世紀以降は商業と観光が主な産業である。

◆ドミニク・パンガロ市長

大学で政治学と演劇の学士号を取得。

州議会議員の立法補佐官として、セーラムの住民が州の機関やサービスを利用できるよう支援し、地域社会を強化する法律を起草、住民への対応サービスを提供した。州議会で働きながら、重ねて夜間の大学に通い、政治学と公共行政の2つの修士号を取得した。その後、セーラム市の首席補佐官として市役所のサービス向上に努めるほか、平等性と包括性を意識した視点で、財政管理、住宅の手ごろな価格の確保、市内の交通インフラの整備、気候変動対策などの推進に取り組む。

セーラム市の第52代市長に就任。（セーラム市役所ウェブサイトより引用）



セーラム市庁舎

◆市長とのミーティング

【観光について】

セーラムの観光のメインは「魔女裁判の悲劇」である。人口4万5千人の静かな街が10月のハロウィン時には全世界から120万人が訪れ、町全体がアーティスティックになり、そのインパクトは非常に大きいという。「ビジネスにはいいが、公共の安全性が最も重要である。無事故を期し、警察官を増やす対策を行っている。大勢の観光客のコントロールが大切で、セーラムには他の時期も来てほしいと切実に思う。」と市長が言及した。

【住宅の課題について】

セーラム市はボストンのベッドタウンとして人気が高い。人権、性的指向、宗教に関係なく、移民に対しても寛容なコミュニティであるだけでなく、美しい景観や活発なアートシーンが魅力のため、移住希望者が多い。市長は「手頃な住宅が不足しており、高騰する家賃の抑制が課題」と述べた。高層マン

ション建設の考えについての質疑に対しては、土地の制約、また渋滞悪化の懸念などから「大田区のような高層マンション建設は考えていない」と述べた。美しい景観を保ちながら、住民が定住できる環境整備を重視する意向である。

【ホームステイについて】

海外派遣報告書（以下：報告書）には、大田区の中学生在がセーラム市でのホームステイを通じ、英会話力だけでなく、それぞれの価値観にも大きな刺激を受けた事が綴られている。それを、市長とのミーティングで伝えることができた。

報告書には「アメリカで経験したことを多くの人に伝え、自分が世界の架け橋となれるように努力をしたい」。また、アートクラブの生徒は「帰国後に『絵の表情が豊かになったね』と先輩から褒められた。海外派遣で得

られたものは私の宝です」などと綴られている。人生観にも大きな影響があるホームステイの交流は、国と国の外交では得られない、地域レベルでの心と心の交流で深い結びつきが生まれていることを実感。

「セーラムの名の由来である『平和』の精神が子どもたちに根付いていると感じた」と伝え、市長も「若者への交流が世界平和の一步になる」「報告書には、いかにセーラムへの訪問が自分達を変えたか、心の温かさが非常によかったかを伝えるもので、私自身もそれを受けて感動している」「セーラムから大田区へ海外派遣する生徒たちも同様に心の交流を深めている。地域レベルでの国際交流の重要性を改めて感じている」と言及した。

【市長の取り組む教育について】

教育に関する質疑応答では、市長の取り組む教育についての質問に対し、市長は「セーラムの公立校は、以前は課題が多く、家庭によっては進学先を迷う状況だったが、この2～3年で改善が進んでいる。具体的には、

- ・初期教育（幼児教育）では、市立・私立の幼児教育機関が連携。（小学校への統一の学習基盤を整備している。無償化を伴うものだが、無償化に反対意見も）。
- ・中学校では最新データを活用（生徒減少に伴い、統合と教員削減へ）。
- ・高校では校舎の老朽化が進み、制約が生じているため、改築に向けた議論が進められている。

これらの改革により教育環境が改善しつつある。」と答えた。

【所感】

パンガロ市長は沢山の役務があり多忙な公務の中、貴重な時間を創り 私たち団員を笑顔で迎え入れてくださった。短時間ではあったが 穏やかな雰囲気の中で 幾つもの事をミーティングできた。

1991年から大田区との親善交流が世代を越えて確実に受け継がれ、互いの心に根付く「平和」の絆を深める 歴史の1ページを共に綴らせていただいたことに心より感謝する。



市長室にてパンガロ市長とミーティング

「心の交流が非常に嬉しい。」と最後に語ったパンガロ市長は、優しさに満ちた目をしていた。

パンガロ市長が翌日にアップしたインスタグラムには

「大田区はセーラムの姉妹都市となって 35 年が経ち、この関係の歴史や国際的な友情の絆の重要性について語り合う、素晴らしい午後を過ごしました。」と綴ってもらえた事をもって報告とする。

《参考文献》

1. ウィキペディア

セイラム魔女裁判 - Wikipedia

2. 立命館大学

本当にあった！ヨーロッパの魔女裁判。 | ”法学”で世界はもっとおもしろくなる | 法学部 | 立命館大学

3. セーラム市役所ウェブサイト

<https://www.salemma.gov/mayors-office/pages/mayors-biography>



パンガロ市長のインスタグラムへの投稿

1. セーラム市の小学校制度の概要

セーラム市の公立小学校は、一般的な公立学校、イノベーションスクール、チャータースクールの3つの主要な教育機関に分かれている。

- 公立学校：セーラム公立学校が運営する伝統的な小学校。セーラム市には6つの公立小学校があり、そのうち2つの小学校がイノベーションスクールとなっている
- イノベーションスクール：公立学校の枠組みの中で運営される。教育内容が柔軟で、公立学校よりも独自のカリキュラムを実施可能。今回、視察に訪れたのは、2つあるうちのひとつとなる the Bentley Academy Innovation School である
- チャータースクール：セーラム市と州・政府の資金援助を受けながら、独立した学校委員会組織により運営されているが、教師や学校長等は公務員である

その他、特別な支援が必要な生徒のための学校として、下記2つがある。

- 代替学校：学校に通うことが難しい生徒のための学校。学校に行くことがトラウマとなっているため、通常ショッピングモール内にある
- 行動学校 (Behavior School)：様々な理由から暴力など危険な行動をとる子供たちが通うための学校

2. the Bentley Academy Innovation School について

- バイリンガル教育

the Bentley Academy Innovation School は2020年に開校したばかりのイノベーションスクールである。英語とスペイン語の二言語教育プログラムを実施。幼稚園クラスは全てスペイン語で授業が行われる。そのため、学校長のほかに、識字率をあげるための識字コーチや2言語プログラムについての説明をするためのリクルーターも存在。



学校の外観

図書館では、英語とスペイン語の本をそれぞれ揃え、赤色テープがスペイン語の本、ブルーのテープが英語の本とそれぞれ記載された言語により色分けされている。また、スペイン語と英語がともに併記されている図書も置かれている。そして司書は、英語とスペイン語のバイリンガル対応を可能とする。

英語はスペイン語に比べると複雑な言語構成をしているが、英語を話す、ということはアメリカで暮らすうえでもっとも大切なことであることから、母語となる第一言語が英語ではない生徒たちも多く学校に通っている。前述のとおり、母語が英語・スペイン語以外の生徒たちもいるが、まず初めに習うのは、スペイン語と統一されている。

3. 多文化教育と言語教育の取り組み

多文化共生のための取り組みとして、学校では、さまざまな言語や文化背景を持つ生徒たちが通

い、お互いの文化を尊重し合う活動が行われている。

- カフェテリアでの国旗掲示：各国の国旗を掲示し、異なる文化を尊重する意識を育む
- 家庭料理の提供：朝食、昼食、夕食が学校で提供され、月に一度、各家庭の料理を通じ、相互理解を深める取り組みが行われている。キッチンスタッフとともに各家庭の味を提供することで、母語が異なる生徒同士でも“セーラム市”に帰属意識を感じられることを可能とするための取り組み
- 多言語翻訳とサポート：学校からの資料はすべて多言語に翻訳され、ネイティブスピーカーのサポート体制も整備されているが、生徒たち自らが自分たちの言語でアクセスできる環境を整えている



カフェテリア



クラスの様子

セーラム市では、英語だけではなくさまざまな言語を話す生徒、また、文化背景を持つ生徒たちがいる。半分英語、半分スペイン語で話す生徒、ウクライナ語、ロシア語、中国語を話す生徒もいる。視察先とは別の学校では、通う生徒の母語が90種類以上とのことで、多文化

共生のための取り組みは、セーラム市では大変重要な課題となっている。

4. アメリカには、不登校児童がいない

アメリカでは、16歳までは学校に行く、という法律が制定されており、さらに、1～9学年（日本の小学校1年生～中学校3年生に相当）の生徒が学校に行っていないことが確認されると、ネグレクトとして、生徒の親は、州によって裁判所に報告される。

そのため、セーラム市内では、学校に行っていない生徒というのはほとんどいない。学校に行けなくなってしまった生徒たちは、ショッピングモール内にある代替学校へ通う。前述のとおり、学校に行けなくなってしまった生徒たちは、学校に行く、という行為が感情のコントロールを難しくさせることから、代替学校をショッピングモール内に置くことで、学校という意識を低下させ、通いやすい環境作りを行っている。また、代替学校に通う生徒は、夜に働いていることが多いため、11時～14、15時まで授業が行われ、その後、働きに行くことができる仕組みとなっている。

5. 福祉に頼らないための教育の必要性について

アメリカでは、小学校、中学校に通う生徒でドロップアウトしているこどもはほとんどいない。なぜならば、ドロップアウトさせないための体制が整っているからだ。アメリカでも、以前は学校からのドロップアウト率はとても高かったが、1980年代ごろから、課題を改善するために様々な取組を行ってきた。そのうちのひとつが、学校に通う生徒が妊娠・出産した場合のデイケアセンターがあることだ。授

業中、赤ちゃんや子どもを見てもらいながら、学校に通うことができる。もちろん、大学とも連携しており、高校時代に預けた同じデイケアセンターに預けることが可能となっている。

学校からドロップアウトしたら、福祉に頼っていくしか道はない。すると、未来永劫、政府の福祉に頼っていくことしかできないが、教育を継続することができれば、福祉に頼らずに自分で生計を立てて、生きていくことができる。福祉に頼らずに、教育を行うことを重要としていることがわかった。

日本とアメリカでは、学校の制度もさることながら、考え方も大きく異なることがわかり、大変勉強になった。



南米のアーティストによる壁画

I 視察の目的

1月29日（水）ニューヨーク公共図書館の本館、及び分館であるスタブロス・ニアルコス財団図書館（Stavros Niarchos Foundation Library）の視察を行った。世界でも最大級の規模を誇り、多様な人種や文化が混ざり合う都市としても知られるニューヨーク市において、100年以上の歴史を持つニューヨーク公共図書館の提供する多様なサービスや取り組み、考え方を学ぶことは、今後の大田区の図書館運営や整備、サービス向上に資するものと考え、今回視察を行った。

II 視察先の概要

ニューヨーク公共図書館は1895年に創設され、本館及び、ブロンクス、マンハッタン、スタテンアイランドに92の分館を擁する全米最大の公共図書館システムであり、約5,400万点の資料が収蔵されている。なお市内には、その他にブルックリン公共図書館、クイーンズ公共図書館のシステムもあり、市内全体では200以上の施設を擁する。公共図書館という名称ではあるが、運営資金は公的資金と民間の寄付から成り立っており、運営は民間の非営利組織によって行われている。



本館正面入口前にて

III 視察内容

今回の視察では、ガイドを伴っての本館内部の閲覧室や展示室を見学、その後スタブロス・ニアルコス財団図書館マネージャーも含む図書館スタッフから、ニューヨーク公共図書館の運営形態や取り組み、今後の取り組み方等を伺い、最後に分館であるスタブロス・ニアルコス財団図書館内の見学を行った。本館はマンハッタンのミッドタウンのオフィスビルに囲まれた公園、ブライアント・パークの敷地



ミーティングルームでの意見交換

内に位置し、大理石を使ったボザール様式の荘厳な造りとなっている。また、公園の地下は本館の書庫になっている。本館では貸出は基本的に行っておらず、一般的にイメージされる公共図書館とは異なり、研究・学習用の図書館、または博物館や観光地としての側面が強い。一方で、本館から歩いて数分の所にある分館の方が俗に言う一般的な公共図書館の形式であった。一般的とはいえ規模は非常に大きく、ビル一棟を使い8フロアで構成されており、チルドレンセンター・ティーンセンター・ビジネスセンター・ラーニングセンター・リサーチセンター等テーマごと

の分類もされている他、ミーティングルームやレコーディングスタジオなども設置されている。2021 年に全面改装されており、ニューヨーク市内においても、最新鋭の図書館施設といえるだろう。ビル内部は大きな吹き抜け構造になっており非常に開放感が大きく、屋上テラスやカフェなども設置されており、総じて非常に居心地の良い空間となっている。

IV特徴的な取り組み

ニューヨーク公共図書館では電子書籍の提供にも近年力を入れており、Amazon が提供している Kindle のような他の民間サービスへと、図書館側が提供している専用のアプリを用いてリンクさせ、閲覧が可能になるようなサービスの提供を行っている。実際の紙の書籍の購入費よりも電子書籍にかかる費用の方が今では大きいとのことである。また、デジタルアーカイブにも力を入れており、図書館が所蔵している古い資料や貴重な資料を順次デジタルデータ化し、それらをオンラインからも閲覧出来るよう取り組んでいる。他には、本館、分館含めさまざまな無料イベント、プログラム、クラス、読書クラブ等を開催している。英語教室や子どもへの読み聞かせ、大学進学相談会やキャリアカウンセリング、起業や資金管理等のビジネス講座、オンラインでのパソコン教室など、そのジャンルは多岐にわたり、毎月 150 程の大人向けプログラム、50 程のこども向けプログラムを開催しているとのことである。

Vまとめ

ニューヨーク公共図書館で近年特に力を入れている電子書籍の提供についてだが、大田区立図書館においても既にサービス提供を行っている。しかしながらその規模はニューヨーク公共図書館では非常に大きいものとなっていることが分かった。閲覧の為の端末さえあれば利用可能な電子書籍は、利用者にとっては場所を問わず利用でき、なかなか時間の取れない方でも書籍の閲覧が出来る、非常に利用しやすいサービスであると言えるだろう。しかしながらその一方で、一度購入すれば長期間利用可能な紙の書籍と違い、電子書籍では定期的な契約の更新も必要になり、システムの管理・運営も含めサービスの提供には多額の費用が必要になってくる。大田区においても電子書籍サービスの拡充は是非進めて行きたいところではあるが、費用等含めたバランスも考えた上で丁寧に取り組んでいく必要がある



分館外観

と考える。また、ニューヨーク公共図書館では非常に多くのプログラムを開催している。その内容も、今回視察したスタブロス・ニアルコス財団図書館では、オフィス街に位置しているという特性上、ビジネス関連のプログラムが多く開催されるなど、地域の特色に合わせた取り組みが行われている。大田区においても地域特性に合わせた、より一層のプログラムやイベントの開催を計画し、またその為の施設整備も含め、多くの方に利用される図書館を目指していく必要があると考える。今回視察したスタブロ

ス・ニアルコス財団図書館は非常に新しい施設ということもあるが、その作りは利用者にとって、いかに居心地の良い空間になるかを考えて作られていると感じた。大田区内の図書館も施設自体の老朽化が進んでいるものもあり、今後施設の更新が必要になると考えられるが、その際には利便性の他、空間の快適性もしっかりと考え、計画していく必要があると考える。公共図書館の役割は、すべての人が平等に知識や情報にアクセスできる場の提供、それによる学習の機会の提供を行い、地域社会の知的・文化的な基盤となることであると考え。今後も様々な事例を参考にしながら、より魅力的で、住民が積極的に利用できる知の拠点へと発展出来るよう取り組んでいきたい。

参考文献・サイト

ニューヨーク公共図書館 公式サイト <https://www.nypl.org/>

ブルックリン公共図書館 公式サイト <https://www.bklynlibrary.org/>

クイーンズ公共図書館 公式サイト <https://www.queenslibrary.org/>

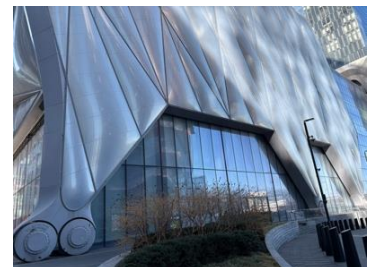
ニューヨーク市ハドソンヤードの再開発は、アメリカ史上最大級として注目されている民間主導の都市再開発プロジェクトである。ハドソンヤードは、ニューヨーク・マンハッタンの西側、ハドソン川沿いにある再開発エリアで、広さはおよそ 11 万平方メートル、総事業費は約 250 ドル(約 3.7 兆円)と想像をはるかに超える大型プロジェクトである。

このハドソンヤードの再開発が進められた背景として、様々な要因はあると思うが、特にオリンピック招致の失敗が大きなきっかけになったと感じた。かつてニューヨーク市は、2012 年夏季オリンピックの開催候補地として立候補しており、このハドソンヤードエリアは、オリンピックのメインスタジアムの計画予定地であった。しかし、オリンピック招致が実現しなかったことで、ビジネス・商業施設・居住エリアとしての再開発計画がもちあがり、結果的に現在のハドソンヤードが誕生した。また、このエリアは従来、公共交通機関のアクセスが不便であったが、地下鉄 7 号線を延伸し、34 丁目ハドソンヤード駅を開設。マンハッタン中心部などからのアクセス向上が現実的になったことが、この大規模開発を後押しする要因となった。

この再開発は、フェーズ 1 (イースタンヤード)とフェーズ 2 (ウェスタンヤード)の 2 つの段階に分かれており、今回の訪問では、オフィス・商業施設が中心エリアとなっているフェーズ 1 を視察した。なお、フェーズ 2 については、住宅や学校、公園、商業施設が建設予定で、2030 年に完成予定となっている。

フェーズ 1 は、2015 年頃から徐々にオープンし、2019 年にグランドオープン。ビジネスマンや観光客でにぎわっていた。その中で、特に目を引くのが、「ザ・シェッド」と「ザ・ヴィッセル」である。

「ザ・シェッド」の特徴は何とんでも屋根部分がスライドして動くことで、その可動構造により、用途に応じた空間調整が可能だ。音楽コンサートやファッションショー、ギャラリー、シアター、テクノロジーを活用した芸術プロジェクトなど、ジャンルを超えたイベントが開催されている。



ザ・シェッド



ザ・ヴィッセル

「ザ・ヴィッセル」は、ハドソンヤードのシンボリックな建築物で、高さ約 46m、154 の階段が絡み合う構造で、蜂の巣のようなデザインが特徴。事故により数年閉鎖していたが、上層階に鋼鉄のメッシュを設置する安全対策がされ、最上階への登頂は制限されているものの、昨年 10 月、3 年ぶりに再オープンしてからも入場者が多く大変人気の施設となっている。

ハドソンヤードへのアクセスについては、地下鉄以外にも「ハイライン」と繋がっている事も魅力の一つである。「ハイライン」は、廃線となった高架貨物鉄道を再利用した全長およそ 2.3Km の空中公園である。見どころとして

は、パブリックアートが所々に展示してあり、自然な形でアートに触れられる環境も素敵であった。また、高架であるため、ニューヨークの街並みを眺めながら歩く事ができるのも魅力である。更に、ハイラインの途中には、ベンチや芝生エリア、イベントスペースなどもあり、一息入れる時間にも利用できそうだ。このハイラインは観光客だけではなく、多くのニューヨーカーがあえてハイラインに上がり、日常で利用している姿もとても良かった。



ハイライン入口

今回、ハドソンヤード再開発の視察を通じて、実際に見た事や感じた事を本区での街づくりや観光施策等に活かしていきたい。具体的には、ハドソンヤードが再開発された背景に、地下鉄の延伸で、34丁目ハドソンヤード駅が開設する事が後押しとなったように、本区でも新空港線開通により、特に蒲田は、羽田空港や渋谷・新宿・池袋・埼玉県方面のアクセスが飛躍的に向上する事から、蒲田の新しい街づくりや沿線まちづくりの気運醸成を高めてまいりたい。

また、ハドソンヤードは、かつてペンシルバニア鉄道の操車場だった場所を人工地盤で覆った上に、新しい街づくりをするにあたり、ニューヨーク市は、超高層ビルの建設を可能にする規制緩和などを行った。本区でも航空法による高さ制限緩和を国に求める事や線路上や操車場などの空中権やその活用方法についても検討すべきである。

そして、ハドソンヤードにおけるハイラインがニューヨーク市の回遊性向上に大きく貢献しているように、本区でも歩いて楽しい街づくり、ウォーカブルな都市への視点と、観光客の流れを誘導し、観光プラスショッピングプラス食事を組み合わせた滞在時間の長い観光ルートを確立し、地域経済活性化につなげてまいりたい。

また、視察に同行して頂いたガイドさんが、再開発をする時に一番重要視されるのは、公園の確保であると言われていたが、その理由は、公園が確保されてないと誰も住みたいと思わない、オフィスビルで働く人も公園等の条件が整ってないと良い企業が参入しないからだという。今回視察のフェーズ1では、駅付近に、まずは小さくても公園が作られてあり、メインとなる大きな公園はフェーズ2に計画されているそうだ。本区でも基本構想策定時でのアンケートで、子どもたちの声が一番多かったのが「公園」であった。今後、新しい街づくりの大事な要素として、子どもも大人も楽しめて憩いの場となるような公園についても議論に加えていきたい。

最後に、今回視察したハドソンヤードのフェーズ1とフェーズ2の全体が竣工した時にどのような街が出来上がるのか、街づくりの経過を見守っていきたい。



ハドソンヤード再開発地区にて

1月30日(木)午後、ニューヨーク市移民対策局を訪問。

◆ 目的

羽田空港を有する大田区は「国際都市おおた」として多文化共生推進プランを掲げている。観光客のみならず外国人区民も増加しており、令和7年1月現在、総人口の約4%（3.2万人）を占めているが、言語が通じないことによって子供が不登校になったり、ルールが分からずゴミの廃棄でトラブルになるなど課題もある。実際に、埼玉県のあるエリアでは特定の外国人が移り住みコミュニティを形成しており、住民とのトラブルも多いと聞く。移民を多く受け入れているニューヨーク市での対応や状況を伺い、今後の大田区政に活かすことを目的とする。



ニューヨーク市庁舎

◆ ニューヨーク市での移民への対応

「家のない人に屋根を提供しなければならない」というニューヨーク市の法律があるため、申請に来た人にはシェルターを提供している。移民を積極的に受け入れるバイデン政権をよく思っていない南部の州知事は、民主党が強いニューヨーク市に移民を移送するようになったため、ここ2～3年間は移民が急増した（年間23万人）。市内のあちこちでシェルターへの申請に来るため、最初に手続きを行う場所を集約し、閉業したルーズベルトホテルをアライバルセンターとして設置した。必要に応じて医療を提供し、家族や知人がいる場合は移動してもらうので、シェルターに入る人は20%程度とのこと。シェルターではタイムリミットを設けていて、単身の場合は30日、家族の場合は60日まで。延長が必要な場合は再度申請することも可能。シェルター数が全く足りないため、ホームレス用のシェルターを移民へ提供するなど需要に対して数を増やしているが、追いついていない。滞在中はチャージ式のカードが支給され、指定された店舗で食材や日用品を購入することができるが、現金の支給はしていない。

以前は非営利団体が言語のサポートや資格・就職支援をしていたが、人手が足りず委託業者に頼っている状況。グアテマラやメキシコなど南米からの移民が多いが、アフリカや中国から入国する者も多く、シェルターには160カ国の人々がいるため言語のサポートが難しい。子供がいる場合は、ガールスカウトを紹介したり、学校に通訳を派遣したり、アフタースクールプログラムを提供するなどしている。いかにして自立させるか、また文化風習などの違いについても説明し、国のルールを守ってもらうように努めている。

◆ 移民を取り巻く環境

80%の人はシェルターを出てなんとか生活を送っている。工事現場やレストラン、デリバリーなどが多いが不法就労も多く、性風俗や人身売買も起きており、犯罪に手を染めている人もいるとのこと。統計は取っていないが、ニューヨーク市の賃料が非常に高くそもそも空きがないため、ほとんどの移民はニューヨークを離れているとのこと。市内にいたとしても狭いアパートにぎゅうぎゅう詰めで住んでいたり、モスクの地下に住んでいたり、様々な状況がある。



移民の現状についてヒアリング

◆ 状況変化

1月20日トランプ氏が大統領に就任した。トランプ氏は不法移民の強制送還を政策に掲げていたが、視察時点ではまだ就任から10日しか経っていないこともあり、市の対応として特段オペレーションに変化はないという。しかし、今後具体的な指示によってはシェルターの移民をチェックするようになることもあるかもしれない。したがって、シェルターにいる移民は非常に怯えているという。いつ拘束されるか分からないので、早くホテルを出たがっているとのこと。

また、当日はルーズベルトホテルでの視察も予定されていたが、情勢の変化に伴い混乱していることから、現地視察は見送ることとなった。

◆ 所感

当局職員の方も移民2世であり、やりがいを持って仕事に取り組まれていた。「今私たちがサポートしている人たちやその子供も、20～30年後にはこのニューヨークを支えているかもしれない」と言っていたことが印象に残っている。やはり国や市の成り立ちやカルチャーが日本とは全く異なるのだということを改めて実感した。移民に対する市民の意見としても、「これがニューヨークのアイデンティティだ」と捉える人もいれば、「制度を悪用されている」と否定的な人もいようだ。これは州によっても、世論は大きく変わってくるのだと思われる。アメリカや欧州各国も転換期にある今、大田区としても外国人といかに調和していくか、ぜひ先行事例を参考にしたい。



ニューヨーク市庁舎知事室にて

おわりに

副団長 小峰 よしえ

今回の親善訪問は大変有意義であり、海外派遣を通じた異文化交流が子どもたちの将来にとって重要であることを改めて実感した。ホームステイによって、大田区の中学生が人間的に大きく成長する機会を得られることは、価値のある人材育成の事業であると感じた。

◆中学生の体験の重要性について

本年度の海外派遣報告書（以下：報告書）には、「様々な人種が暮らすアメリカでは、相手を許したり受け入れたりするための 必要な言葉や文化なのだと思います」と記されており、生徒たちが敏感な心で交流の意義を深く感じていることが伝わってきた。

報告書を読み返すと、ホームステイや異文化交流を通じて、海外派遣を経験した生徒達は、以下のような成果を遂げたことが分かる。

- ・ 失敗しても受け入れられる経験を経て自己肯定感が高まった。
- ・ 「違う＝間違い」ではなく、「違いを尊重する」意識が芽生えた。
- ・ 文法的な正しさよりも「伝えようとする力」が重要であると実感した。
- ・ （受け身になりがちな生徒も、積極的に話す必要があり）行動力が鍛えられた。
- ・ 異なる価値観を体験し、柔軟な考え方を持つようになった。

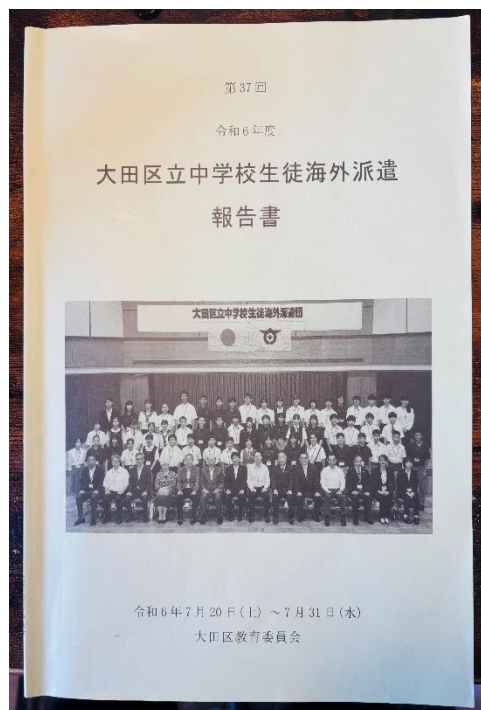
このように本区の中学生在が「多感な時期に自己肯定感を高め、積極的に行動できるようになる」ことの 教育的意義を重要視し、共有認識として広げていきたい。

◆ホームステイの温かい環境

ホームステイを基盤としたセーラムでのスケジュールは充実しており、ハーバード大学やセーラム警察、ボストン州議事室などの訪問だけでなく、バスケットコンテストや水泳なども組み込まれている。更に、緊張しなくてすむ小単位の英会話の勉強会もふんだんにセッティングしてある。

英語の語学習得が大きな目標の一つである海外派遣だが、現地に到着するや否や、ホストファミリーの「英語を間違えてもいい。あなたのありのままを受け入れるよ。一緒に楽しみましょう！」という温かい環境に包まれ、生徒たちは自信をつけていったようである。

静岡大学の^{はやしきいこ}早矢仕彩子教授の研究¹では、「留学経験が学生の自尊感情や自己効力感を高め、自信を持って行動できるようになる」ことが示されており、今回の海外派遣での経験とも合致していると認識する。



大田区立中学生派遣報告書

◆ 感動したこと 2つ

① ホストファミリーとの心の交流

ホームステイ終了時に中学生たちがホストファミリーとの別れを惜しみ 涙を流した理由が、ホストファミリーと会った瞬間、理解できた。すぐに心が通じ合い、「笑顔で互いを尊重し認め合い、信頼に繋がる」貴重な時間を刻めたからだ。

団員が心を合わせ、日本文化の体験を企画。着物での訪問も喜ばれ、個々に交流を深める和気あいあいの充実した懇親会となった。時間が足りないほどであった。

また、ホストファミリーのフレンドリーで前向きな市民性は、魔女裁判の暗く重い歴史に対し、今でも真摯に向き合う謙虚な姿勢から生まれたものだと感じた。

これらの交流の感動の拡がり、無形の財産として厳然と存在している。それは昨日今日の交流ではなく、30 年以上の歴史の重みが基盤を成しているものだ。



着付け体験の様子

一方で、ホストファミリーの高齢化という課題に対して、セーラムではピーター氏を中心に、若いボランティアの拡充に力を入れており、大田区でもセーラムの子ども達を受け入れるホストファミリーの確保に引き続き尽力したい。



ピーター・ドーラン氏の挨拶

② ニューヨーク移民対策局でのミーティング

トランプ政権誕生直後で、移民受け入れに対する緊張感が高まる時期だったが、その中、寝る間を惜しむほど熱心に取り組むスタッフに「この仕事をしていて一番よかったことは何か？」と質問した。すると「労働許可取得などのサポートをした家族から、慣れない英語で感謝の手紙をもらった時です」という答えが返ってきた。加えて「私たちの祖先も移民でした」という一言。これには大きな感銘を受けた。アメリカが移民を受け入れてきた歴史。様々な課題はあるものの、共存の姿勢を大切にするスケールの大きな国であることを改めて感じた。

◆ まとめ

私たち、訪問調査団は、移動の時間などにも、「セーラム市の教育」や「セーラムの素晴らしい市民性」などについてミーティングを重ねた。それは、この交流による深い感動が続いていたからだと思う。私自身が受けたカルチャーショックは、新たな視点をもたらし、人生観を深く豊かにしてくれた。

もとより海外派遣を経験した中学生たちは、その感動を前向きな力として、友好の懸け橋となっている。彼らの交流が、平和の種を植えていることは、大きな成果と言える。

一方、大田区がモデル事業として大森東小学校で取り組んでいるOGC（おおたグローバルコミュニケーション）では、海外体験ルームで ネイティブの英語授業を受けた結果、「小学6年生の約8割が英検5級に合格しただけでなく、自己肯定感が1年間で71%から84%へと13%も向上した。」と伺っている。

ここで着目すべきは、「英語力と自己肯定感の向上」は海外派遣事業の効果とも共通していることだ。

今後、大田区に要望することは、

「スピード感と安定性を持ったOGCの拡充」

「おおた教育ビジョンの「持続可能な社会を作り出すグローバル人材を育成します」の方針に基づいた更なる平和教育の拡充」である。

最後に、大田区の中学生の海外派遣事業を 当初より支えてきた ピーター・ドーラン氏の言葉を紹介し、報告の結びとする。

「この事業に関わる両市の 多くの人々の唯一の目標は、友情と平和の絆を永続的に築くことです」この事業を支えて下さっている皆様に改めて、衷心より感謝を申し上げる。



セーラム市庁舎前にて

《参考文献》

1. 日本人学生の留学経験と自己に関する意識の変化に関する縦断的研究 早矢仕 彩子